



平成八年十月二十六日発行

編集 社寺建造物美術協議会

発行 社寺建造物美術協議会

〒108 東京都港区高輪一―五―二十二

(株)小西美術工芸社内

TEL (03) 3447-1481

FAX (03) 3447-0736

第八回

社寺建造物美術協議会 総会並びに研修会報告

平成八年度の第八回総会は舞台を兵庫県に移して、九月十八・十九日の二日間開催いたしました。

今回は特に大谷金工部会長に肝入りをお願いし総合プランを作って頂きました。

九月十八日(水曜)の午後、阪神電鉄尼崎駅に集合。建造物の見学研修として、重文本興寺開山堂及び重文長遠寺本堂を訪れ、(財)文化財建造物保存技術協会(以下、文建協と略称します)から派遣されておられる福本都治所長のご案内を頂き、昨年一月十七日の兵庫県南部地震災害の影響による被害状況を現場でつづ

さに見学し、所長のご説明を受けました。

本興寺方丈は解体修理となり揚屋工事を進めているところで、方針としては文化財としての意義と構造的に耐震としての数字の兼ね合いを考えているとの由、柱は補強するために新素材の炭素繊維と知木を、内法壁は耐力合板(構造用合板)を使用するとの事で、特に眼に見えない箇所での補強を重点的に施工しているそうです。開山堂は主として足元の補強が主体となっている、という非常に詳しいご説明を頂きました。

本興寺から少し離れた長遠

寺は本堂の破損がひどく、その損壊の状況を伺い驚きました。

本堂外部の上長押が三間も前側にはずれ飛び、建具は倒れたりねじれたり、縁束の内転び、柱の歪みなど枚挙に暇がありません。兵庫県指定文化財の客殿も含め、部分修理ということで耐力合板を入れたり、長押の取り付け方で特殊釘を使用するそうです。重文の多宝塔は相輪が傾斜するなどの被害があり、上層の土台とかの修正などの見学研修と詳細なご説明を頂きました。

九月十九日(木曜)の午後、総会を終え次の研修に移りました。宝塚市の重文(中筋)八幡神社の現場へ伺い、文建協の原田正彦所長から種々被害の有様、復旧の始まりから現状までの復元の苦心談を聞きました。宝塚市を襲った阪

神淡路大震災は、八幡神社の地域で震度七の激震でした。

神社では本殿の覆殿が大きく横に転び、本殿を押し潰したのです。この対策として覆殿がしっかりしていたら今回の倒壊が防げたという観点から強度のある建物にし、本殿も床下部分などを補強する施工を行いました。丹塗・彩色は新しく塗り直し面目を一新。

尚、彩色は明治二十八年のものを取り払い、嘉永六年の状態に復旧し彩色見取図も作製したとの事で、被害から甦った各部分の素晴らしい姿をご披露頂きました。

総会及び親睦会会場の宝塚グランドホテルは温泉付の宿で会員一同は研修の疲れを寛いで過し、午前中は同ホテル内の会議室で「第八回社寺建造物美術協議会総会」を開催いたしました。

まず初めに恒例の講演をお願いし、(社)全国国宝重要文化財所有者連盟(以下、全文連と略称します)事務局長の後藤佐雅夫様から、全文連の仕組みと活動について縷々ご説明があり、資料を基にお話を伺い更に同連盟への賛助会員の入会につきお勧めを頂きました。

した。又、日本の漆生産の現状について(植栽の人材、植栽地の状況、低収入、需給状況、価格等)種々調査されたお話がありました。特に国内産の漆の生産量の多い岩手県の生産組合が国指定の補助育成の対象となったので、気運が大

変盛り上がって来ていること。採取可能な場所が限られるのでこの取組方とか、重労働の割に低収入(価格の点もあるが)、企業として合理化が難しい点などのご指摘がありました。この漆生産について関係機関も力を入れられるとの由で、我々材料を使う業者側にとっても有難いことです。

今後の当会への提言として、世の中にもっと発言出来る団体に成長して欲しい、と言う激励の言葉で結ばれました。

次に(財)文建協参与の工藤満様から関西地区、特に兵庫県南部の大地震の災害復旧工事一覧表を基に、兵庫県、大阪府を中心とした阪神大地震による全体的な被害状況につき詳細なご説明と、現場を視察して廻られた時の無残な印象についてのお話を承りました。殊に今回研修対象の三現場の他に、旧神戸居留地十五